

MfG_J_Temples_in_Senju_Kusouzu

(C) 春日正利

米百俵と千手・草生津の散策

参考 ガイドルートと歩行距離

A. 長岡高校記念資料館

1. 摂田屋出身の画家 川上四朗 (1889-1983) の作品
2. 長岡高校第二校歌の、「額装の歌詞」
3. 長岡の隠れたキーワード 「文の林」と「三つ葉柏」

B. 千手の八幡神社

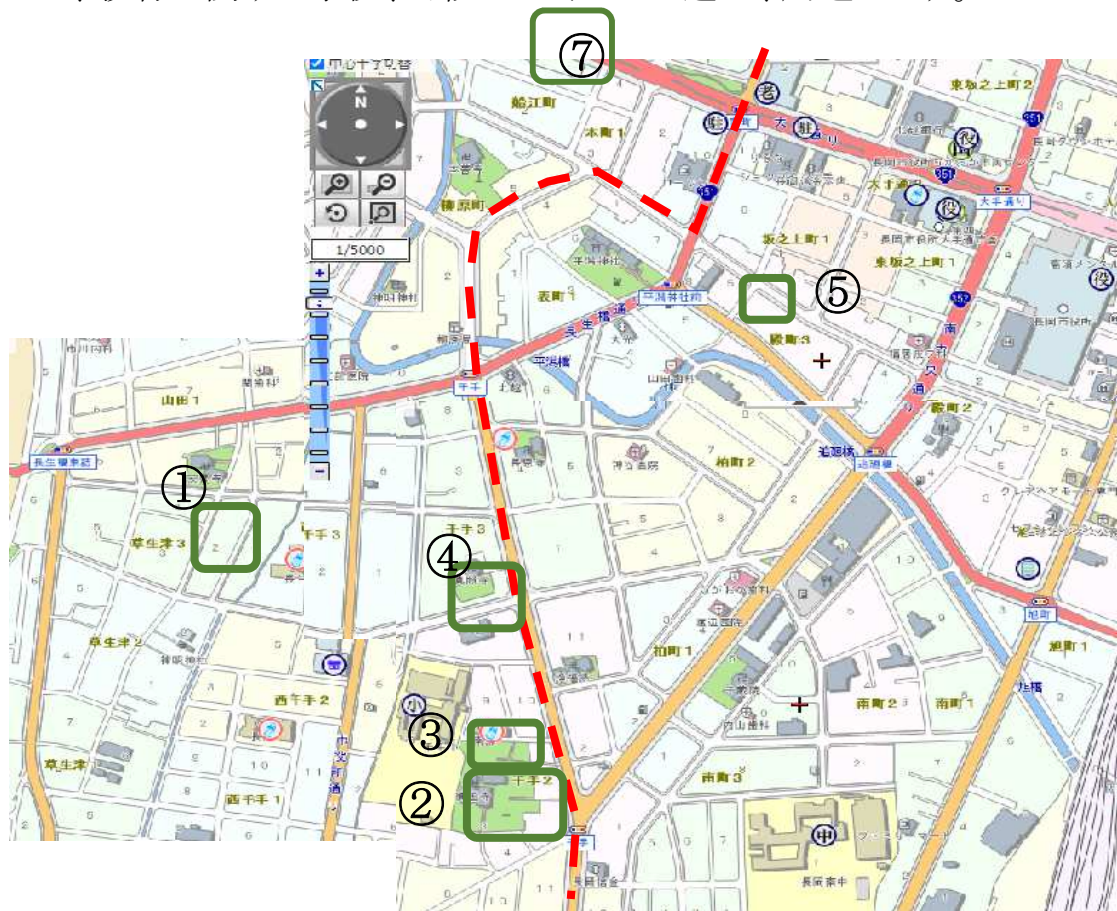
1. 千手の道しるべ
2. 長岡の花火打上げ
 - (1) 「長岡花火」のルーツ
 - (2) 異論についての補足
3. 牛久保の八幡神社
4. 長岡藩の三つ葉柏の由来

C. 駅近くの、教育に関連する寺院

1. 昌福寺 長岡国漢学校発祥之地
戦災殉難者之墓
鵜殿団次郎
2. 興国寺 小林虎三郎、雄七郎
3. 眞照寺 高橋竹之介
横田切れと大河津分水工事
高橋竹之介書 「三島億二郎追悼長句一編」
4. 唯敬寺 赤川と柿川
星野嘉保子の星野家菩提寺
以成肅雍之徳
嘉保子、仏教への帰依とご褒美
5. 長永寺 長永寺の現在地への移転
恵禅住職と私塾「囂外鬻」
野本恭八郎、星野嘉保子

参考 ガイドルートと歩行距離

長岡高校・記念資料館、四郎丸の昌福寺⑥を経て、下記の丸数字のところを中心に、教育に関する学校、寺院のいくつかを適宜、周遊します。



- ① 唯敬寺（星野嘉保子碑の碑文原本 西園寺公望の書）
- ② 興国寺（小林虎三郎関連）
- ③ 千手 八幡神社（牛久保・三つ葉柏の由来の神社より牧野氏勧請）
- ④ 眞照寺（高橋竹之介関連）
- ⑤ 誠意塾跡（高橋竹之介開塾の漢学塾跡、長命堂飴舗）
- ⑥ 昌福寺
- ⑦ 長永寺

赤の破線は、江戸期の旧三国街道を示す。

長岡高校記念資料館 スタート、全コースを回って、

東口のEブラザまでで 4.4キロ、

長岡高校を省略し、昌福寺 スタート、全コースを回って、

東口のEブラザまでで 4.0キロ。

休憩を兼ねて、唯敬寺 では、本堂で西園寺公望の書を拝観する予定です。

阪之上小学校・伝統館の訪問は省略したが、二時間という時間的制約を考慮してのことであり、ゲストの関心によって、長岡高校記念資料館との入れ替えも可能ですし、各学校・寺院での話題の差し替えにも対応します。

A. 長岡高校記念資料館

いろいろなものが展示されていますが、ここでは三つだけ、ご紹介します。

1. 摂田屋出身の画家 川上四朗(1889-1983) の作品

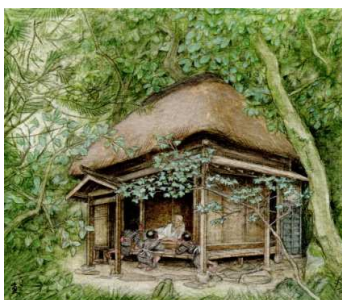
童画と云うジャンルを確立した、挿絵画家。



タイトル 一本橋



1905年前後の、彼の長岡中学在籍時の絵で、生家の近くの太田川土手から、川と東の山並みを描いています。山の端がポイントです。



典型的な童画

五合庵の絵

2. 長岡高校第二校歌の、「額装の歌詞」

この歌詞は、長岡高校 第二校歌の原詩です。(書は父の久萬一)
昭和十六年(1941)十月二十三日の創立70周年記念事業のひとつとして、堀口大學が、その七月に母校同窓会より、第二校歌の作詞の依頼を受け、作詞したもので、作成後、佐藤春夫氏にも批評を乞う。字脚や字句を正したのち、作曲には若い作曲家をと、父と友に相談し、大學が旧知の深井史郎氏の名があがったとのこと。尚、書は、大學が終生、長城先生と呼んで敬愛した父、久萬一によるものです。

(1) もとの長岡高校 第二校歌

作詞・原曲 堀口大學、作曲 深井史郎

一、
翳すゆかりの三葉柏
源淵とほきわが藩の
高き精神を新しく
ここに伝へて剛健の
校風守る一千余
北の丈夫血はたぎる

二、
鋸山はけざやかに
東の空に聳えずや
汪洋として信濃川
西の沃野を洗はずや
秀麗の気を鍾めたる
われ等濁りのあるべきや

三、
歴史かがやく長岡の
文の林に生ひたてる
若木は国の柱ぞと
誓ひ男々しく奮ひ立ち
修文鍊武日も足らぬ
われ等よ学徒報国團

四、
若き民に賜はりて
あやにかしこき勅語
ささげまつりていざ共に
常に戦の庭に在る
心をつねのこころにて
励め励まん我が徒よ

(2) 現在の歌詞

しかし、現在の歌詞は、以下の通り。 第二校歌 昭和16年 創立70周年記念
作詞・原曲 堀口大學、作曲 深井史郎

一、
翳すゆかりの三葉柏
源淵とほきわが藩の
高き精神を新しく
ここに伝へて剛健の
校風守る一千余
北の丈夫血はたぎる

二、
鋸山はけざやかに
東の空に聳えずや
汪洋として信濃川
西の沃野を洗はずや
秀麗の気を鍾めたる
われ等濁りのあるべきや

三、
歴史かがやく長岡の
文の林に生ひたてる
若木は国の柱ぞと
誓ひ男々しく奮ひ立ち
智育体育日も足らぬ
われらよ自由民主の子

四、
若き命を誇りにて
行手はるけき日本の
平和の明日のいしずゑを
築く責務を双肩に
父祖の労苦を心にて
励め励まん我が徒よ

作詞の経緯は、「堀口大學全集 七 VII 身邊雜録」p698-704 小澤書店(1983) 九月になってから「翳すゆかりの三葉柏」の言葉が浮かび、その後わずか 一か月の間に作詞・作曲がなされたわけで、おどろきである。

第二校歌は、昭和26年創立80周年に合わせて、改めた。

昭和26年復刊の 和同会雑誌96号(創立80周年記念号)の第二校歌の説明に「昭和16年制定(作詞堀口大學氏、作曲深井史郎氏)のものを、今回、一部改訂していただいたもの」と付記し、新しい第二校歌・歌詞を掲載している。

しかし、そのように至った経緯の詳細は、同記念館でも、不明とのこと。

最初の歌詞は、真珠湾攻撃の年であり、致し方ないところです。

戦後、このように変わり、よかったと思います。

3. 長岡の隠れたキーワード 「文の林」と「三つ葉柏」

長岡の、かくれたキーワードとして、「文の林」と「三つ葉柏」があります。

(1) 「文の林」は、第二代の新潟県令・永山盛輝が 1876年12月1日の 長岡学校の開校式に臨んで、『長岡中学校の開校を祝て』、つぎのような和歌「長岡の文の林に生立る わか木は国のはしらとぞなれ」と詠んだことによると 思われます。 阪之上小学校の校歌にも「文の林」があります。

阪之上の校歌 第一校歌

作詞 多田 正知 作曲 若林 孫次

一	二、	三、
文の林に生いたてる	この学びやに集う子よ	平和のしるしかかげもて
若木は国の柱ぞと	文化の光身にうけて	越路の原のはてしなく
三葉の柏の緑そう	朝な夕なに勧めかし	愛と敬とを身にしむる
ここ長岡の阪之上	勇氣正義の二つ道	自主協同の民として

新潟県令・永山盛輝

明治8年(1875)新潟県令に就任。地租改正・国会開設要求・政党活動・ 農業不況など、政情多端な県政を担当したが、度量と優れた行政手腕で

乗り切り、地方制度の整備・産業の近代化・教育の振興など多くの業績を 残し、明治18(1885)本県を去った。のち、元老院議員・貴族院議員。

書のほか歌にも優れ、一方では藩士時代に腕が立ったことからか槍の名人ともいわれていた。

永山県令の意図に依って建てられた県会議事堂は、当時においても全国屈指のもので、永山県政を象徴する記念碑的な建物とされる。

教育熱心な永山県令は、学校落成や記念式典にすすんで出席し、関係者の労をねぎらい、生徒や教師を励ました。

1875 11月 第二代就任

1876 4月 新潟病院を県立に移管。

5月 長岡女紅場を開設

7月 官立新潟学校に百工化学科特設を布告

12月1日の長岡学校の開校式に臨んで、和歌

『長岡中学校の開校を祝て』

長岡の文の林に生立る わか木は国のはしらとぞなれ」と詠む。

(2) 長岡の、もうひとつのキーワードの「三つ葉柏」も、市内の学校の校歌の多くに取り入れられていますことは、長岡のお住いの方々にはご存知の通りです。

・長岡藩の三つ葉柏の由来

同上 <https://www.norichan.jp/jinja/kenkou/ushikubo.htm>

一族の祖先、牛久保の一色城主牧野成富の孫・成時(古白)

一色氏の一族である一色刑部少輔時家が宝飯郡長山郷(現在の豊川市牛久保町)に一色城を築いて定着し、牧野成富に城を任せた。

この神社の若葉祭(通称うなごうじ祭・うじ祭は案内によりますと、

このお祝りは、「一色城主牧野成時(古白)が、ある年の四月八日に、この若宮殿に参詣した時、駿河の領主、今川氏親より馬見塚(現豊橋市)に築城を命じられました。喜んだ古白は、社前の柏の葉で御神酒を献じて家臣と共に祝い、家紋を三ツ柏に改めました。

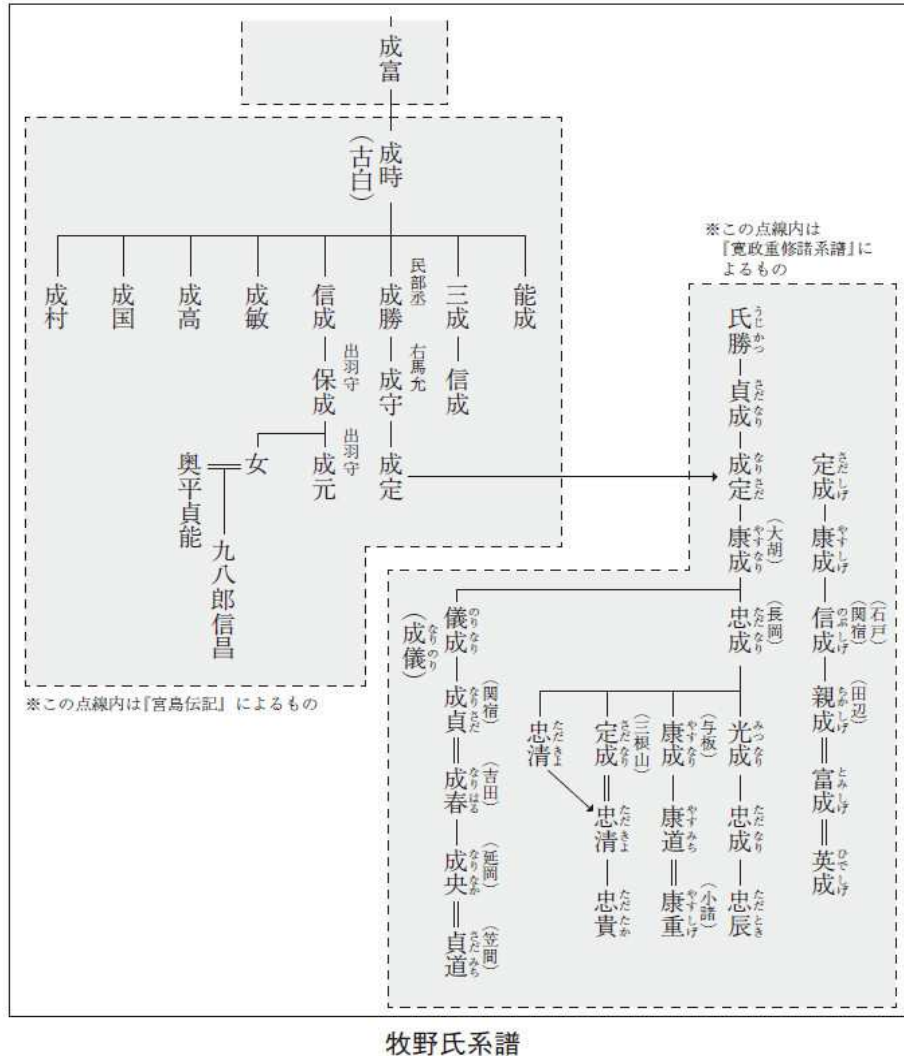
この時、境内の若葉が照り映えているのを見て詠んだ古白の句

「きのうけふ 若葉なりしか杉の森」にちなみこの祭りを「若葉祭」と呼ぶようになりました。古白はじめ、代々の城主は、若葉祭の時、領民の主だった者を

城中に招いて酒食をふるまいました。酒に酔った領民たちは、帰る途中ごろごろと路上に寝転んでしまいました。

この様子を今に伝えているのが、祭りの神幸行列の最後尾を受け持つ「やんよう神」の一行です。路上に寝転ぶ様子は「うじむし」に似ているところから、この祭は「うなごうじ祭」とも呼ばれています。」

以上、引用。



<https://www.bunsin.org/> 三河ビュー/三河の文化を訪ねて-人物史/

B. 千手の八幡神社

1. 千手の道しるべ

左 東京 三国街道

右 西京 中山道、北陸道

(私の想像) 下図の石柱が、長岡城方面を背にし、千手の現・三差路に立っていたと思われる。



祭神は譽田別命(応神天皇)。また、隣接していた諏訪神社を合併した関係で建御名方命を合祀する。

元々は三河国牛久保(現在の愛知県豊川市牛久保町)にあったが、藩主家牧野氏に伴って越後長岡藩に移転し、長岡城に遷座する。

元禄年中(1688年 - 1703年)に現在地に移転。

2. 長岡の花火打揚げ

(1) 「長岡花火」のルーツ

～「長岡花火」のルーツは遊廓にあり!? 花火大会はじまりの歴史を探る |より。

長岡の初めての花火打揚げは明治十三年(1880)九月、遊郭芸妓らが中心。千手町八幡様のお祭り(例大祭)に合わせて揚げたもの。

大正15年(1926)に新聞社と長岡商工会議所が中心になって長岡煙火協会をつくり、市民のものにしようということで遊廓から独立。

～ 今泉省三氏『長岡の歴史』(1968年) より、抜粋引用
『三島郡片貝の富豪佐藤某が、明治十二年九月の片貝浅原神社祭礼に、長原大島屋の芸妓たちを誘って、花火見物に出かけた。芸妓たちは、夜空にあやなす華麗さに、すっかり魅せられてしまった。それから数日ののち、佐藤はふたたび大島屋へ来て、芸妓たちに、片貝のように花火をうち揚げて、長岡、というよりは遊廓を賑わしてみる気はないかと持ちかけた。このことから翌年の、明治十三年九月十四日、打ち上げとなった。

明治12年9月10日付けの新潟新聞

『長岡千手町の八幡神社は、九月十四・十五両日が例祭なるが、本年は同所千手横町・山田町・長原の貸座敷の四十七名が、醸金して花火を揚げたり』

大島屋のつるといふ芸妓が佐藤さんに話を持ちかけられ、上げてもらったことは間違いないでしょう。一説では遊廓の芸妓・娼妓の水子供養のためといわれていて、少し離れた片貝(現在の小千谷市片貝町)でもそうした慰霊の花火が上げられていたので、それならちょうどいいと遊廓に受け入れられたようです。

9月の十五夜を中心に開催されていた遊廓の花火大会は、しばらくはごんまりしたものでしたが、大正15年(1926年)に新聞社と長岡商工会議所が中心になって長岡煙火協会をつくり、市民のものにしようということで遊廓から引き上げたんです。その後は10月に開催したり、商工祭として開催して商業や工業の関係者からお金を集めたり。戦前のスポンサーは個人、戦後は企業中心と、いろいろな変遷がありました」

稲川さんいわく「千手の八幡様だと花火の打ち上げは危なかったんじゃないか。草生津の神明様だったのかもしれない」とのこと。

発祥については、やはり諸説ある。

引用、以上。

(2) 異論についての補足

「千手の八幡様では町なか過ぎて、花火の打ち上げは危なかった。
そこで草生津の神明社で打ち上げた」という説があるが、
いまでこそ頷ける説だが、当時は、どうだったか。

もともとの辺りは宿場町で、道路のつくりは当時の街道を活かす設計である。
また遊郭街でもあり、長岡花火の発祥と大きく関わっており、
今の千手小学校の場所が、空き地だったら、ここで花火をあげても、
不思議ではない。

草生津の神明社は、長岡市草生津2丁目2番9号、近隣神社の兼務神社。
唯敬寺の南方向、100m。道路を越えるところ。

3. 牛久保の八幡神社

平成祭礼データ（<https://www.norichan.jp/jinja/kenkou/ushikubo.htm>）によりますと、「社伝によれば、天平神護（七六五～七六六）の頃、三河国は日照りがつづき、五穀実らず飢饉となった。

朝廷では穀倉を開いて庶民をお救いになったが、その翌年もまた不作となり、里人は離散し土地は荒れるにまかせられた。

その頃この地は常荒と呼ばれたという。

国司は住民の心の荒ぶことを憂い、氏神の社殿を建てて仁徳天皇をお祭りして人々の心のよりどころとした。

これが八幡社の始まりで、その頃は若宮殿と称せられたと伝えられている。

これは今から千二百年余りも昔のことである。

平安時代には国司大江定基、鎌倉時代には守護安達藤九郎盛長らの尊信篤く、しばしば参拝せられ社殿の修造もあったということである。

永享十一年（一四三九）一色時家がここに一色城を構え、神域をととのえ社殿を修造申し上げた。

明応二年（一四九三）牧野成時（号は古白）が領主になると、城中にあった武神八幡宮を城外に移し若宮殿にあわせ祀って、社殿を修復するとともに祭礼を盛んにした。若宮殿はこれより若宮八幡宮と呼ばれるようになり、さらに四百年程たった明治五年（一八七二）には八幡社と改称され現在に至っている。」とあります。

住所：愛知県豊川市牛久保町常盤164

以上、引用。

この神を牧野氏が越後長岡藩にお連れし、長岡城に遷座させた後、元禄年間に現在地に移すことになりました。

三つ葉柏でも、八幡様の再興でも、牧野古白が登場しています。

それだけ歴史の逸話に残るということは、きっと名君だったのでしょね。

武勇隣国に肩を並べる人なし、文化人としても傑出していたと、言われています。

C. 駅近くの、教育に関連する寺院

1. 昌福寺（しょうふくじ） 曹洞宗寺院

戦災殉難者之墓があり、また、鵜殿団次郎、栖吉城主本庄清七郎の娘で徳川秀忠に奉仕した妙徳院の墓がある。

また、代々の住職が奉仕した関係で旧制長岡中学校にあった諏訪神社が学校敷地拡大で移転してきた、俗称・諏訪堂がある。開基は、堀氏と云われる。はじめ上田町にあった。現地に移転し、長岡藩の兵糧預かり所となって、戊辰戦争では藩の治療所(野戦病院)としても使われた。その後、明治2年に小林虎三郎がこの寺の本堂を借りて国漢学校を開校した。

昭和20年の長岡空襲犠牲者を埋葬した戦災殉難者之墓があり、毎年8月1日早朝には戦災殉難者法要が行なわれる。(昭和22年9月、慰霊の墓を建立)

「防空壕に避難せよ」を忠実に守り、平潟神社268名、柳原の神明様140名という多くの犠牲が出ました。そのほとんどは男も女も分からない状態のまま、平潟神社で重ねて荼毘に伏した後、昌福寺に葬られたが、埋葬の際、人々はその骨の中から肉親の骨として一掴みいただいて持ち帰ったそうです。

国漢学校は 1869(明治2)年に 昌福寺の本堂を借りて開校し、

翌年には 近くに新校舎を建てて移転した。(旧 大和デパート付近)

しかし 新たに発布された学制によって 1871(明治4)年には廃止されて、新しい小学校に引き継がれていった。このような歴史により、昌福寺の門柱の脇に「長岡国漢学校発祥之地」の碑がある。

蕃書調所 航海術、数学教授 鵜殿団次郎(春風)の墓が、戦災殉難者之墓のすぐそばに立つ。

蕃書調所(蛮書調所 / ばんしょらべしょ)は、1856年(安政3年)に発足した江戸幕府直轄の洋学研究教育機関。

安政2 (1855) 年洋学所設置の決定に基づき、同4年開校され、洋学の教授、外交文書の翻訳などを司った。のち文久2 (62) 年洋書調所、さらに翌年には開成所と改称され、明治維新後は大学南校の母体となり、やがて開成学校、東京開成学校を経て東京大学へと発展をとげた。

・悠久山に、明治十二年仲夏建立の鵜殿団次郎石碑

石碑の右半分が勝海舟、左半分が伊東祐亨(すけゆき)の撰文

碑には、門人元帥海軍大將従一位大勲位功一級伯爵伊東祐亨謹識

初代連合艦隊司令長官 中将(1894年(明治27年)7月19日 - 1895年5月11日)

大正六年 五月に改建

石碑の裏面に、子爵牧野忠篤のほか大橋新太郎、山田又七、

福島甲子三、山口誠太郎らの名。

2. 興国寺(こうこくじ) 曹洞宗寺院。

山号は太平山。等級は二等法地。本尊は上品上生阿弥陀如来。
当初は興国庵という名称であり、現存する本尊が阿弥陀如来であることから
浄土真宗や浄土宗などの浄土教系寺院であったと推測される。
その後、正保3年(1646年)に越後長岡藩家老で牧野頼母家当主の
牧野正直(市右衛門)が大檀那となって広大な堂宇を建て、曹洞宗
僧侶の方外雲吉を開山として再建し、興国寺と改宗改称した。
戊辰戦争で焼失し、再建されるも大東亜戦争長岡空襲により再度消失。
戦後二十三世大観良辨(俗名・中村良辨)により再建され現在に至る。
また、米百俵の故事で知られる長岡藩大参事小林虎三郎の墓が東京より
当寺に改葬されている。現在の方丈は二十四世大忍慧道(俗名・小西慧道)。

墓は虎三郎、十七歳下の雄七郎との二人の墓。
東京オリンピックで谷中墓地改装で移設を求められた住職が、
長岡の小林家に相談。
菩提寺の興国寺二十三世大観良辨師に相談したところ、
良辨師は長岡に移すことを提案。
昭和34年7月31日トラックで東京を立ち、8月4日に興国寺に到着。
8月24日に納骨法要がなされた。

小林 雄七郎は、幕末期の越後長岡藩士、明治期の官吏、衆議院議員。
弘化2年12月23日(1846年1月20日) - 明治24年(1891年)4月4日)
新潟町奉行を務めた長岡藩士小林又兵衛の第7子で、「米百俵」で知られた
小林虎三郎の弟。藩校の崇徳館に学ぶ。戊辰戦争で敗北し、江戸に出て、
明治3年(1870年)慶應義塾に入学。
卒業後に土佐で教師、そのとき虎三郎も同行。簿記の本もある。

大蔵省紙幣寮(現・国立印刷局)の官吏となる。第六十九国立銀行設立に尽力。
明治8年(1875年)東京に在住の旧長岡藩士と共に育英事業団体「長岡社」を
創設、商人や農民も受け入れて広く人材の養成に努めた。
財団法人「長岡社」は現在も存続しており、長岡出身の大学生を援助している。
墓所は東京の谷中墓地であったが、昭和34年に兄・虎三郎と共に故郷である
長岡の菩提寺、興国寺に改葬され、現在に至る。

大勢での参拝は、庫裏で坊守様(先代・中村良辨師のお嬢様)にご挨拶し、
参拝を依頼すること。

3. 眞照寺 真宗大谷派の寺院

住所：長岡市千手3丁目2－36

高橋竹之介（たかはしたけのすけ 1842－1909）の墓がある。

幕末-明治時代の尊攘(そんじょう)運動家。

天保(てんぽう)13年生まれ。江戸で塩谷宕陰(とういん),古賀茶溪にまなぶ。戊辰(ぼしん)戦争の際,郷里越後(えちご)(新潟県)で松田秀次郎らと方義隊(のち居之(きよし)隊)を結成,新政府軍を先導した。

明治2年東京遷都に反対して投獄されるが,出獄後は子弟の教育にあたった。

明治42年11月7日死去。68歳。字(あざな)は誠仲。号は蘇門。名は竹之介。

明治十二年、殿町に誠意塾を創立。門人600人と言われる。かつては、墓の後ろ、誠意塾の門人であった武石貞松謹撰のに碑文があった。

大河津分水建設を提言。

中之島・杉の森の高橋竹之介展示館(顕彰館)

明治29年(1896)「横田切れ」の大洪水で越後平野は大打撃を受けます。

大津波で大半が水没していた越後平野の歴史は治水の歴史でもありました。

横田切れの翌年、高橋竹之介は立ち上がります。自ら考案した「北越治水策」を、時の権力者であり、ともに戊辰を戦った山縣有朋へ向かって建白したのです。帝国議会では誠意塾の教え子大竹貫一が越後の治水を必死に説いていましたが、竹之介のこの尽力があつてこそ、当時の歴史的な大工事『大河津分水』の建設が成されたといっても、過言ではありません。

高橋竹之介展示館には、明治天皇から大竹貫一、高橋竹之介への褒美の品、平櫛田中作の白木の木像があります。貫一は、私より竹之介先生こそ、いただくに相応しいと、受け取りを固辞したと伝えられています。

高橋竹之介のように新政府への人脈を持つ人物が、自ら教育した越後の後輩を活躍の場へ送る要となっていたことは忘れられません。

同時に、敗者であった長谷川泰や外山脩造らが(皆、天保13年生まれ)戦禍の中に立ち上がり、新時代を創っていったことも忘れてはなりません。誠意塾で竹之介の薫陶を受けた堀口久萬一が、外交官として活躍し、日露戦争勝利に間接的に貢献をしたことも、知ってほしいです。

横田切れ120年 大河津記念館・展示説明会にて 20160827参加

横田切れ(よこたぎれ)は、1896年(明治29年)7月22日に発生した、信濃川の堤防決壊による洪水である。

数日間続いていた大雨により信濃川の水嵩が増大し、新潟県西蒲原郡横田村(現・燕市横田)の堤防の部分約300mを主として多くの堤防が決壊した。これにより新潟市関屋までの広い範囲が浸水した。

浸水は長期間にわたり、低い土地では11月になっても水に浸かったままで、衛生状態の悪化に伴う伝染病が蔓延し、命を落とす人も出た。

当時は熱帯低気圧が梅雨前線を刺激し、二日間で200mm程度の雨量だが、流域全域で降雨。昭和57年水害に似た気候条件。

中越は大半の橋が流出。11月になっても、水が引かないところがあった。長岡駅周辺も水につかった。

～詳細 明治29年信濃川洪水における長岡付近の被害状況(2008).pdf

土砂の厚み1m50cm。掻き出すのに一年。

二年間、チフスや赤痢が多発。大河津工事中もツツガムシで工事従事者が数十名死亡。中之島村(現長岡市中之島)の高橋竹之介は、明治30年、政府の有力者山県有朋、松方正義両者にあてて「北陸治水策」を書き建白した。「治水策」は、近年の洪水は水源地長野県の山林の乱伐によるものと断じ、大河津分水の利を唱え、すみやかに県債を起こして開削すべきことを強く訴えた。分水建設の声は高まり、ついに政府は明治42年に工事を再開。工事中断や地すべりなど、多くの困難を克服し、大正11年(1922年)に通水。

パネルのメモ

七月十八日 9:00 長生橋付近の堤防から越水

七月十八日 16:00 長生橋流出

七月二十日 19:00 魚野川支流 決壊

七月二十一日 燕 熊の森が危険になり、横田から支援
横田の近くの赤沼で刈谷田川が決壊

七月二十一日 長岡 松ヶ崎で40間 決壊
(松ヶ崎f現在の与板橋東詰から2Km下流あたり)
長岡の長岡町、千手町、洪水の中、ついに午後、
大工町太子宫裏で 決壊

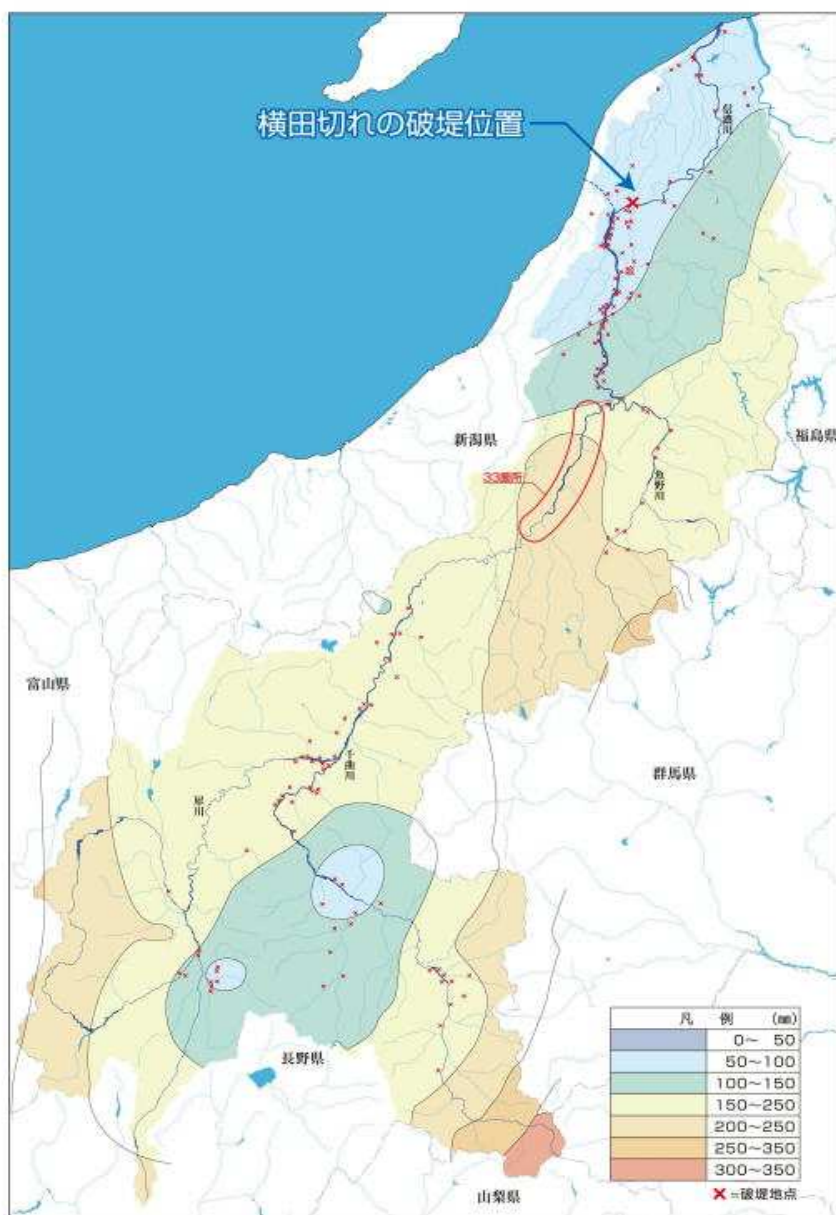
七月二十一日 小千谷 千谷川で決壊
夕方 与板で 決壊

七月二十二日 8:00 燕・横田で360m 決壊。

表2 長岡付近の被害過程

番号	日時	場所	状況
①	7月18日9:00から	長生橋および長生橋下流付近	水を被った
		長生橋付近	消防団が土俵を築くも堤防より越流
		左近の土手	洪水を一時的にくい止め浸水を遅らせた
②	7月18日16:00頃	(長生橋)大橋	流失
③	7月20日夜から	草生津	浸水
④	7月21日14:00頃	不明	数箇所が破堤し浸水域が拡大
⑤	7月21日午後	大工町太子宮裏	破堤
		殿町, 長岡本町, 中島, 千手, 柳原, 神田付近	浸水: 床上3尺(約0.9m)~4尺(1.2m)
		大工町から中島以西	万里広漠の大洋であった
		上田町の橋際	もっとも甚だしい
		中島製油会社	石油土蔵が倒壊し貯油流出

明治29年信濃川洪水における長岡付近の被害状況(2008).pdfより



高橋竹之介書 「三島億二郎追悼長句一編」
～ 長岡市立中央図書館蔵

君不見干戈落、戊辰年當時人情惴惴安、全伏水一朝轟砲礮
驚破四海太、眠戰線遠及北越野、長城魏魏兵三千中有英
傑參帷幕、先生幾人能比肩、先鋒指揮妙見口彈丸雨注立
砲煙含枚夜渡、丁鴻祖逝畢竟若鞭先百戰歸來無餘念、擬
將事業輸微涓、學校病院又工場一郡自任能周旋、伏波襲轍
老益壯、開拓北海渾沌天、瘴癘為虐遂不起銅柱恨不建新連
白雲駕龍仙跡杳、空使人仰前賢、病室賓客肅無語、落花新
緑哭杜鵑

明治廿六年五月念五日於聲石館有故
三島先生之追悼會謹賦長句一篇以誌
於靈前云 辱知生 高橋三寅拜外

サイズ: 135.0cm×66.1cm

明治26年(1893)5月5日、故三島億二郎(1825-1892)の追悼会。
この書幅は、殿町で「誠意塾」を開いていた竹之介(1842～1909)が、
三島の活動や業績を偲んで作った長句で、この追悼会に捧げられた。
竹之介は、このとき51才。両軍が戦って四半世紀がたち、かつての
敵方の長岡町で誠意塾を開塾から十五年以上になっている。
そういう時代であった。

4. 唯敬寺 浄土真宗本願寺派の寺院

20200425春日

(1) 江戸末期に、上田町から現在地へ

唯敬寺の開基は信州松本ですが、江戸時代になる前、長岡の上前島に移り、そして忠精公の頃に上前島から上田町に移ります。

(大手通から長永寺さんに曲がる、角のあたりのようです。)

～長永寺さんのあたりが上田町河戸になりますので、城の入口の町口御門とは100mほどの距離です。

さらに江戸時代の終わりになって、長岡藩御用蔵の拡張のため、赤川町(北文治町)と呼ばれた現在地に移転します。

(2) 赤川と柿川

保育園の建物とグラウンドの間を通っている川は赤川とよばれています。

赤川の上流は工業高校の西を通っています。その先は暗渠のようです。

下流は内川の柿川に流入していきまして、場所は柿川戦災殉難地の碑のある柳原町の柳原公園の近くです。

柿川は江戸時代、信濃川に繋がる長岡船道(ふなどう)と呼ばれる水運の拠点でした。従って、赤川は内川を使った水上物流の終点に当たるのです。「内川と新川・赤川」の関連図を次頁に示します。

(3) 戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所

さらにその後、幕末の数年前、長原町(現在の草生津)に移転し、門前町の開設にも参加したそうです。長原町の寺院の位置は不明です。

寺院の現在地は、保育園を含めると広大な敷地ですが、そのころの唯敬寺境内は、いまの4、5倍はあったようですので、たぶん、そのなかのどこかでしょう。戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所となつて、炊き出しを行なつたとされています。

～ おそらく、上田町河戸から赤川に入り、そのまま長原町の唯敬寺境内に兵糧運び込んだのでは、と思われます。

(4) 明治初期、長岡花火のはじまり

長原町は石打町と並んで「南廊の長原町」、「北廊の石打」と呼ばれるほどの歓楽街となりました。このころ、唯敬寺境内の水子供養の地蔵様を供養するために打ち上げた花火が、長岡花火のはじまりという説も、あります。千手町八幡様のお祭りが最初という説も有力ですが。

(5) 星野嘉保子の星野家菩提寺

星野嘉保子については、「長岡の教育」などで今まで何回か話題にとりあげていますので、省略します。生没年・星野嘉保子(1848-1904)

悠久山にある星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」のもとになった、西園寺公望の揮毫になる書が、唯敬寺さんの本堂に、掲げられています。

星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」について(2016年11月 春日正利)

2017年10月改訂

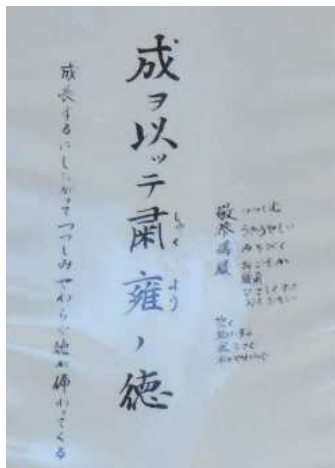
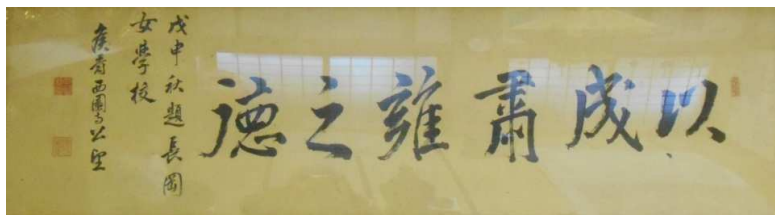
「長岡歴史事典」には、「以成肅雍之徳」 せいしゆくをもってとくのまもりとなす、つつしみ深く穏やかな徳(恵み)の人である、という意味とされていますが、実際に西園寺公望が揮毫した扁額が、星野家菩提寺、草生津の唯敬寺本堂にあり、その扁額脇に掲げられている添書きの説明は、これと少し異なります。

本堂で拝見した扁額添え書きのご説明にある「成るを以って、肅雍の徳」の、「成長するにしたがって、つつしみやわらぐ徳が備わってくる」、という解釈は、この扁額が、学校で毎日生徒達が仰ぎ見る講堂に掲げられていたとの三条住職のお話と考え合わせると、なるほど、そう受け取るべき、とも感じます。

しかし、事典の説明のように、当時のご住職様が、日ごろの熱心なご門徒であった嘉保子さんの遺徳を偲んで、「つつしみ深いおころのなかに、慈悲をたれるお方であった、という、嘉保子先生の優れた徳を讃えるようなことを書いてほしい」と、公望さんをお願いし、それに対して、「では、以前に書いた講堂の扁額の読み方を変えてみては」、と言ったという受け取り方もあるように思います。

阿弥陀様に深く帰依した先生ですから、この徳は、先生が日ごろ詠まれたであろう親鸞様の和讃の恩徳讃の「恩徳」、「仏の恩徳」であり、つつしみ深いおころのなかに慈悲心を示される、というようなことではないかと、拝察しております。

(春日の私見)



西園寺公望揮毫の
唯敬寺様本堂扁額と
扁額添え書き



石碑の碑文

揮毫の年の戊申は明治41年(1908年)と思われます
星野嘉保子歿後4年たっております。

銅像が建立されたのは大正十二年(1923)、
記念の石碑が建立されたのは昭和十一年(1936)とされています。

西園寺公望筆



西園寺公望が明治十四年十一月秋保子刀自の養嗣子野勝氏に書きたるもの

さいおんじきんもち

西園寺公望

嘉永3年～昭和15年11月 91歳没
明治・大正の政界の大元老、能書家
立命館大学創設

せい も しゆくよう とく
読み：成ヲ以ッテ肅雍ノ徳

訳：成長するにしたがつつしみ和らぐ
徳が備わってくる

戊申（明治41年）秋書 ～西園寺公望59歳の時～

目良 卓 先生 訳
（工学院大学付属高等学校教諭）

嘉保子、仏教への帰依とご褒美

(1) 仏教への帰依とご褒美

- 1) 明治13年に、山田町唯敬寺で芸娼妓の裁教授に勤めるなどにより、
同年 本願寺本山より、念珠一連。
- 2) 表町二ノ丁自宅に、長永寺の木曾恵禅師らとともに婦人談話会を開き、
名僧知識を招いて仏教講話を聴聞し、婦人の知識向上に努めた
ことにより、明治20年 本願寺本山より、六字名号。

以上の二点の品の写真は、長岡新聞 1996年 の記事、4月27日(上)、
5月11日(下) にありました。 三章に転載しました。

3) 明治34年 仏教慈善会を起す。

島地黙雷師ら高僧を歴訪して仏教慈善会設立の計画に賛意を得て、
木曾恵禅師はじめ地方寺院の篤志家とともに諸方へ托鉢し、
その喜捨浄財を以って仏教慈善会に寄付。

第一回事業として、山田町唯敬寺を借り受けて芸娼妓の裁縫
教授所を設立。他に長岡病院はじめ市内開業医の賛成を得て
細民に施薬・金品を与えた。

島地黙雷が明治31年秋に嘉保子にあてた漢詩は、黙雷師を
歴訪した折りのものと、思われる。

(2) 島地黙雷さんの漢詩

黙雷が明治31年秋に嘉保子にあてた、以下の漢詩が、唯敬寺に伝わる。
嘉保子が仏教慈善会設立のため黙雷師に面会の折りのものと、思われる。

終時何待佛来迎偏喜平生業事成

念報身游光摂裡逍遙心到法王城

明治戊戌 秋日為 星野女學長 黙雷「印」「印」

読み方

終時に何んぞ佛の来迎を待つ 偏に平生業事の成るを喜ぶ
報身を念じ光摂の裡に遊ぶ 逍遙の心は法王の城に到る

補足

1)「平生業成(へいぜいごうじょう)」とは、浄土真宗において、親鸞聖人の教えを漢字4文字で表した、いわば「一枚看板」とされている言葉です。平生業成の「平生」とは、死んだ後ではない、生きている現在ということ。

親鸞聖人は、人生の大事業のことを「業」と言われています。人生の大事業とは、何のために生まれてきたのか、何のために生きているのか、苦しくともなぜ生きねばならないのか、という「人生の目的」のことです。最後の「成」とは、完成する、達成することですから、「平生業成」とは、まさに「人生の目的が、現在に完成する」ということです。

その答えを、親鸞聖人はハッキリと示されています。「人間に生まれたからには、これ一つ果たさなければならない大事業がある。それは現在、完成できる。だから早く完成しなさいよ」と生涯教えられたのが親鸞聖人ですから、聖人の教えを「平生業成」というのです。

(<https://1kara.tulip-k.jp/company> などを参考にしました。)

明治戊戌(つちのえいぬ)

ぼじゅつ 1898年 明治31年

黙雷師 (もくらい 1838-1911)は、明治時代に活躍した浄土真宗本願寺派の僧。本山の実務トップにあたる執行長(しゅぎょうちょう)を勤めた。1872年(明治5年)、西本願寺大谷光尊の依頼により岩倉使節団に同行。

(3) 実家、姜家、竹山家

大竹家、竹山家をはじめ、当時の名家は、小国・山口家、蒲原・入澤家、和島・久須美家などと、婚姻や養子縁組などを通じて、お互いに親戚関係を結んでいたことを知るようになりました。

星野嘉保子の実家である蒲原・小川家も、分水・竹山家とつながりを持っています。

嘉保子の養嗣子の勝(まさる)氏も、新潟市西堀通りの浄光寺のご出身で、開祖は西園寺家の次男の方が新潟・鳥屋野に庵を結んだのが始まりとされる。その鳥屋院北山浄光寺は、慶長十年(1605)現在地へ移され、昭和16年当時の当主は三十五代目、始祖の時代には親鸞様が来られているとのこと。

5. 長永寺さんと長岡の歴史トビックス

20200425春日

(1) 長永寺の現在地への移転

長永寺さんも、開基は信州で、慶長12(1607年)年に現在の長岡市城岡付近に移り、さらに元和元年(1615年)堀氏の長岡城下整備により現在地に至っているそうです。

(2) 長永寺恵禅住職と私塾「囂外鬘」

木曾恵禅(1815-1896)

17代住職恵涯師の長女木曾操子(みさこ)師が、1839(天保9)年西蒲原郡砂子塚の本願寺派長宗寺より、恵禅師(1815年生まれ)を24歳の時を迎えて、18代住職となりました。

恵禅住職は漢学、宗学、天台華嚴を越後学派僧(そう)朗(ろう)学んだ後、京都の学林で仏教を学びました。長永寺入寺後、1845(弘化2)年に境内に私塾「囂外鬘(こうがいこう)」を開設し、僧俗の子弟に仏学や漢学を教えました。この囂外鬘は操子坊守、長女の展子(のぶこ)師が恵禅住職を助け共に教育に当たりました。

三人の業績は後に「木曾三先生言行録」として出版されました。

恵禅師は資質穏和にして学徳高く、生涯をお念仏の繁盛と人材育成のために尽くされました。囂外鬘は明治32年文部省の私立学校令により学則を更改し、後の恵(え)然(ねん)・昨(さく)非(ひ)住職へと受け継がれてきました。

囂外鬘の主な出身者に、弓波(ゆみなみ)瑞(ずい)明(みょう)(龍谷大学学長)、小野塚喜平次(東京大学総長)をはじめ、学んだ子弟は4千名、卒業者は9百名を数えました。長永寺の本堂は、慶応元年(明治元年1868年)戊辰戦争の兵火に焼かれ消失しました。

以上、長永寺のウェブページ^oの同寺歴史を参考にさせていただきました。

(3) 野本恭八郎、星野嘉保子

恵禅師は、長岡に養子に來たばかりの野本互尊翁 野本恭八郎を学問に誘い、その後、妻と三人の子女が通ったと、稲川明雄さんの「互尊翁 野本恭八郎」に書かれています。

星野嘉保子は、山田町で裁縫伝習所を開いていた41歳のころ、長永寺の婦人法話会にも参加していると、同じ「互尊翁 野本恭八郎」にある。(p263) 恵禅師は74歳であり、嘉保子は、直接、聴聞していると思います。

木曾恵禅(1815-1896)

星野嘉保子 (1848 -1904)

参考地図

